
出会いはオープンカフェで

funit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出会いはオープンカフェで

【Nコード】

N9366Y

【作者名】

f u n i t

【あらすじ】

ドラマーを探す大学生ブライアンとティム。彼らの前に現れた天使のようなルックスのロジャー。

QUEENの前身バンドスマイルの誕生秘話。

英国のバンドQUEENのメンバーをモチーフとした二次創作です。実際のメンバー、出来事とは関係ありません。

「見つかった？」

ロンドンの冬は寒い。

雪がちらほらと降る中、なぜかオープンテラスに座っている背の高い男は、向かいに腰かけ寒そうに身を縮めるもう一人の男に聞いた。

背の高い、ダークブラウンのカーリーヘアの男の顔は端正で、雪がうつすらと積もった道路に反射する太陽に眩しげに目を細める。細身の体と寒さから一層白くなった肌は病弱のようにも見えるが、その傍らにはしっかりとギターケースが置かれていた。

「なかなかいいいな。だいたいお前の求めるドラマーの条件がムチヤすぎるんだ」

出されたばかりで湯気の立つコーヒーを少しずつ口に含みながらも
う一人が言った。吐き出す息は依然白いままだ。

「そんなことない。中途半端に広く募集するより、求めるものを細かく明示したほうがいいんだよ。例えば天文学の勉強でもな、あまり広くやりすぎるより…」

「あーあー分かったよ、お前の話は長くなるからいけない。とにかく、今日俺の大学にも募集の紙貼ってくるからよ。夕方お前ん家行つていいか？軽くやるうぜ」

軽くやる、とはセッションのことだ。

長身で話の長い彼はブライアン・メイ。ロンドンの名門大学インペリアルカレッジに通う彼は、秀才で勉強家。しかし同時に生粋のロッカーであり、ギターは彼にとつて友人であり恋人であり宝であった。

そんな彼とバンドを組もうというのがティム・スタッフエル。少々つり目が特徴的だが涼しげな顔の彼は、ベースとボーカルを担当する予定だ。イーリング美術大学に通う彼もまたロッカーであり、現在はと言つと「ミッチ・ミッチェルやジンジャー・ベイカーのようなドラマー」を探しているのであった。

「ただ上手いだけじゃだめなんだろ？アンタのそのギターの音に合うドラムじゃなきゃいけない」

ティムは困ったように笑った。

ブライアンのギターサウンドが特徴的だ。なんといつても取り壊した暖炉から自作したという彼の分身「レッド・スペシャル」から紡がれる音は、ただのギターの音ではなくまるでバイオリンのような繊細なメロディーのようであり、ロックというよりもむしろクラシ

ツク音楽とも言えるようなものである。ブライアンの音楽はただのロックじゃない、それはタイムも分かっていた。だからこそドラマ―募集のあの難しい条件も納得だったし、見つけることが容易ではないことも承知の上であった。

「大学終わったらこのカフェで落ち合おう。じゃあな、タイム」

インペリアルカレッジは世界有数の名門大学であり、理系の学部しかない。そのため女性は少ないのだが、それでもブライアンはモテていた。

長身で端正なルックス、ギターを背負うその姿は様になっているし、何より大学内でも有名な秀才だったからだ。教室に入ると何人かの女子が話しかけてきた。

「ブライアン、おはよう。元気？」

「今日もこの後スタジオ行くの？」

「ドラムは見つかった？早くブライアンのステージ見たいわ」

ブライアンは優しく微笑みながら、彼女達よりも前、最前列に腰を下ろす。

「いや、まだ見つからないんだ。君達も、もし周りでドラムやっているヤツいたら教えてくれるかな」

「すぐ教えるわネ！」と可憐に笑う美女たちだが、まあ期待はできないだろう。

ブライアンがノートや筆記用具を机に置いたその時だった。

「ブライアン・メイって君かな？」

話しかけてきたのは、優しげな雰囲気の子。

見たこともない、ブライアンはそう思ったが、向こうは自分を知っているようだ。

「そうだけど…何か？」

警戒しつつもそう答えると、彼は微笑んで紙を一枚ブライアンに見せた。

『ミッチ・ミッチェルやジンジャー・ベイカーのようなドラマー求む Brian May』

それは紛れもなく、大学の掲示板に貼った「あの」広告だった。しばらく目を丸くしていたブライアンだが、はっと我に返り男を見た。

「き、君ドラマーなのかい？」

パツと見、その男はあまり音楽をやっているように見えなかった（失礼だが）。

おとなしそうだし、弱気そうにも見える。

この男が自分の求めているドラマーなのだろうか。

男はブライアンの問いに慌てたように首を横に振った。

「いやいや、僕じゃなくて知り合いにドラマーがいるんだ。この貼り紙のこと話してたらものすごく喜んでさ、趣味も合うみたいなんだ」

ああ、合点がいった。

ブライアンは口を開けたまま頷く。彼は話を続けた。

「もし君が彼に興味があるなら、今日大学に呼ぶよ。別の大学に通ってる、確か君より2つ下のヤツ」

「はあ…そんなに言うなら、会ってみたいな。君は、彼のドラムを聞いたことは？」

「あるよ。僕は音楽のことよく知らないけど、パワフルなドラムだった。ヤツはロッカーさ」

「パワフルか…。今日、その彼は来れるのかい？」

「ああ、今日は暇だって言ってた」

「じゃあ、今日の夕方センターのコスタ・カフェに来るように伝えてくれるかい？」

大学も終わり、朝タイムと会ったカフェに急ぐと、朝と同じ席にタイムは座っていた。

「ごめんタイム、待った？」

「いや、さっき来たところだ」

慎重にギターをテーブルに立てかけると、すぐにブライアンは大学であったことを話した。

「パワフルなドラムか……。見てみないことには分からないが、やっ
と候補が見つかったな」

「ああ、それで今日ここに来るよう伝えてもらったんだ。だからこ
の後は俺ん家じゃなくてスタジオ借りて、すぐに彼の腕を見ようと
思う」

「おお！やるなブライアン。なんか楽しくなってきたな。で、そい
つの名前は？」

「ロジャー・テイラー。よろしく」

ブライアンが言おうとした名前が、ふたりの頭上から聞こえた。

ブライアンとティム、同時に声の聞こえた方を見上げる。

そこに立っていたのは、小柄で細身な金髪の…

「女じゃねえか」

バコッ

眩いたと同時にティムはテーブルに突っ伏した。

「いつてえ…何すんだよ！」

金髪のその人は、クスクス笑うとブライアンとクリスの間のイスを引き、腰を下ろした。

「俺がロジャー・テイラー。ドラマー募集してたのってアンタらだよな？」

改めて聞いた彼の声は、しゃがれていた。

顔は一言で言えば美少年だ。ティムが女と言うほどだ、白い肌に大きな碧眼、そして綺麗なブロンドの髪は肩程まで伸びており、この声と喋り方を抜けば女と言われてもなかなか分からないだろう。

「君が、ロジャー？」

おそろおそろブライアンは聞いた。この華奢で女の子みたいな彼がパワフルなドラマーとは信じられなかったのだ。

ブライアンの問いにムツと眉間にしわを寄せ、彼はあのしゃがれたハスキーヴォイスで溜め息を吐く。

「だからあ、そうだって言ってるじゃん。俺の名前はロジャー・メドウズ・テイラー。アンタがブライアン・メイ？」

「あ、ああ…うん、そう…」

未だにポカンとしているブライアンとティムに呆れたように笑うと、肩にかけたままにしていたバッグから2本のスティックを出した。

「ドラムやってるんだ。俺もジミヘン大好き」

ロジャーは無邪気に笑うとその内の1本をくるくると器用に回した。

その夜、ロジャーをドラマーとして迎え入れたバンド「スマイル」が誕生した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9366y/>

出会いはオープンカフェで

2011年11月27日23時51分発行